

『史記』の伯夷・叔斉以前

下 見 隆 雄

中国思想史の中における隠遁者のとりあつかいの特殊性は、彼らが王朝の支配権力から無縁であろうとするのみか、むしろそれに対して否定的でさえあるのに、このような存在者が無視されないのみか、各時代に賞揚を受けてさえいる点に指摘される。これらのことについてはすでに晋の葛洪の著した『抱朴子』の外篇における逸民論を明らかにすることの中で述べ、中国の専制社会と隠逸の特殊な結びつきを、経書との関わりの中で見るることによって考察して来た。^①そして次に隠遁の発想なり起源をさぐるべく『論語』に見える隠者について考察した結果、伯夷叔斉という人物についての問題が派生して来た。^②

伯夷叔斉の説話は、命をかけて信念を守り通した人物の話、あるいは隠者の模範として、各時代にわたって多くの人を魅きつけている。多数の伯夷論が残っていることはこ

れを如実に物語るものである。しかし伯夷叔斉という人物のイメージは、あまりにもドラマチックにまとめあげられた『史記』伯夷列伝によって固定されてしまっていることも否定できない事実であって、その弊は、先秦諸子に登場する伯夷叔斉についての断片的な表現が、すべて、これより後に成立したはずの『史記』伯夷列伝の説話によって説明されているところに明確に表われていると言えよう。伯夷叔斉の説話が時代を越えて、『史記』に見えるような型のものであったかどうかについては問題がある。そこで、ここでは『孟子』から『史記』に至るまでの夷斉説話の変形と発展を明らかにする。そしてそのために、『論語』に見える夷斉に注目し、これらに対する注釈の態度を見るところから論を発してみたい。

(一)

『論語』の中で伯夷叔斉をのせている文は四ある。それは、

(1) 子曰、伯夷叔斉、不念旧惡、怨是用希 (公冶長)

(2) 冉有曰、夫子為衛君乎。子曰、諾。吾將問之。入

曰、伯夷叔斉何人也。子曰、古之賢人也。曰、怨乎。

曰、求仁而得仁、又何怨乎。出曰、夫子不為也(述而)

(3) 齊景公有馬千駟、死之日民無德而稱焉、伯夷叔斉餓于

首陽之下、民至于今稱之、其斯之謂与 (季氏)

(4) 逸民、伯夷叔斉……子曰、不降其志、不辱其身者、伯

夷叔斉与 (微子)

である。ところでこれら断片的な伯夷叔斉についての表現は、これだけでは伯夷叔斉がどんな人になをした人かということははっきりしない。また逆に、背後にある説話があはつきりしないと、これらの文の意味そのものも理解できない。そこで、一般に伯夷叔斉の説話としてまとまったかたちのものは『史記』の伯夷列伝に見るので、これによっていると思われる。(1)の古註には

孔安国曰、伯夷叔斉、孤竹君之二子也、孤竹国名也
というし、(2)の古註にも

孔安国曰、伯夷叔斉讓国遠去、終於餓死

とあるように、孤竹国の二子であつて、互に位を譲りあつてその国を出奔し、終に餓死したことなどが、背後にある説話として解せられているようである。(3)の皇疏は

夷斉是孤竹君之二子也、兄弟讓国、遂入隱于首陽之山、
武王伐紂、夷斉扣武王馬諫曰、為臣伐君豈得忠乎、横尸
不葬、豈得孝乎、武王左右欲殺之、太公曰、此孤竹君之
子、兄弟讓国、大王不能制也、隱於首陽山、合方立義、
不可殺、是賢人、即止也、夷斉反首陽山、賣身不食周
粟、唯食草木而已、後遼西令支與柘家白張石虎往蒲坂採
材、謂夷斉曰、汝不食周粟、何食周草木、夷斉聞言、即
遂不食、七日餓死

とのべている。皇疏も『史記』の説話によつて解していることは明らかである。ただ最後のところで、夷斉が周の草木を食うことにさえ指摘を受けて、志の清をまもる彼らが遂に餓死したとするのは『史記』に言わないところで、これは、後にもとりあげるが、皇疏が『古史考』の説など

『史記』以後成立の夷齊説話を交えて解したためである。これらこまかな部分の考証は後にゆずるとして、『史記』の伯夷列伝にはすでに『論語』の前引の本文が引かれており、司馬遷はむしろこれらも資料にしながら伯夷列伝をまとめあげていったものである。

『論語』の文の成立については複雑な問題が存することは確かであるが、これらが『史記』に見えるところのままとった夷齊説話によって解されることに対してはもう少し慎重でなければならないのではなからうか。『論語』のこれらの文章が成立した時期を詳細に論定することはきわめて困難であるが、すくなくとも、成立した時期に、注疏に云うような説話がすでに背景に存したとは考え難いところである。このことを明確にするため、以下『史記』伯夷列伝成立までの夷齊説話の変遷を見てゆきたい。

(二)

夷齊についての説話で、もっともまとまった形で示されているものが『史記』の伯夷列伝であることはいうまでもない。それによると次のような内容が示される。

伯夷叔斉孤竹君之二子也、父欲立叔斉、及父卒、叔斉讓伯夷、伯夷曰、父命也、遂逃去、叔斉亦不肯立而逃之、国人立其中子、於是伯夷叔斉聞西伯昌善養老、盍往歸焉、及至、西伯卒、武王載木主、号為文王東伐紂、伯夷叔斉叩馬而諫曰、父死不葬、奚及于戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎、左右欲兵之、太公曰、此義人也、扶而去之、武王已平殷乱、天下宗周、而伯夷叔斉恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、及餓且死、作歌、其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏、忽焉没兮、我安適婦矣、于嗟徂兮、命之衰矣、遂餓死於首陽山

これによれば、今の『論語』に見える夷齊について、その背景にあった説話が本来はどうであったかは別として、後世、『論語』の文を解する者が『史記』のこれによっていることは論を待たないところである。夷齊の説話が本来『史記』に見えるような形のものであったのかどうかについては問題が存する。津田左右吉著『論語と孔子の思想』^⑧には、『論語』に登場する伯夷叔斉について、特に、公冶長・述而兩篇の夷齊の文の背景には、微子篇に両者を逸民^④

と規定するような説話が存したかどうかは疑問であるとし、『孟子』や『韓非子』・『莊子』などに見えるものを資料としても、伯夷の話のものとすがたは、逸民としてではなかったのではないかと思われることを云い、この話は先秦時代のおわりのころに逸民としてのイメージが濃くされ、首陽の話も叔斉もこのころつけ加えられたのであろうとしている。

こまかい部分については問題がないわけではないが、これは夷斉説話の成立ということについての示唆に富んだ指摘であったと云える。これらの問題を考察するにあたって、先ず『孟子』に見えるものからとりあげてみる。ここには『史記』に見えるものないしは一般に考えられている夷斉の話とはかなりの差が認められるので興味深いものがある。

(三)

(1) 非其君不事、非其民不使、治則進、乱則退、伯夷也

(公孫丑上)

(2) 伯夷非其君不事、非其友不友、不立於惡人之朝、不与

惡人言、立於惡人之朝、与惡人言、如以朝衣朝冠坐於塗炭、推惡惡之心、思与鄉人立、其冠不正、望望然去之、若将浼焉、是故諸侯雖有善其辭命而至者、不受也、不受也者、是亦不屑就已。(公孫丑上)

(3) 伯夷辟紂、居北海之滨、聞文王作興曰、盍歸乎來、吾聞西伯善養老者 (離婁上)

(4) 伯夷目不視惡色、耳不聽惡声、非其君不事、非其民不使、治則進、乱則退、横政之所出、横民之所止、不忍居也、思与鄉人处、如以朝衣朝冠坐於塗炭也、当紂之時、居北海之滨、以待天下之清也、故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志、……伯夷聖之清者也(万章下)

(5) 居下位、不以賢事不肖者、伯夷也 (告子下)

この他、尽心上篇に見えるものは(3)と、また尽心下篇にも見えるが、それは(4)の一部と同文である。

『孟子』に見えるものの特徴は、まず伯夷とのみ云って叔斉を云わぬことである。これは、夷斉説話には本来叔斉は云わなかったのだとする考え方が成立してしてもよい有力な資料であると云えよう。その他わかることは、伯夷は殷の紂王の暴政を避けて北海の浜にいたこと、周の文王の

徳をしたったこと、それ故、伯夷には常に悪を悪んで清なるものに加担する人として、政の善悪を示す一つの基準として扱われることなどである。

『史記』に見える夷斉説話の細かな展開は『孟子』においてはほとんど見えない。しかるに従来の注釈はこれを『史記』の説話によって説明しようとしているのは牽強附会と云わざるを得ない。公孫丑篇の「伯夷、非其君不事、……」の趙岐の注は「伯夷、孤竹君之長子、讓国而隱居者也」とし孫奭の疏も『史記』の伯夷列伝によってこれを敷衍するにすぎず、この点は焦循の『孟子正義』も同様である。ただ万章篇の「伯夷、目不視惡色、……」については、焦循の正義は趙佑の『四書温故録』を引いている。それによれば『論語』に伯夷叔斉を連ね云うのに『孟子』は伯夷だけ云うこと、『史記』では国を讓ったこと、義として周をきらったことなどを云うのに、『孟子』では紂を避けたことをしぼりば云うことなどから、『論語』のもので『史記』列伝の文で説明できるのに、どうして『孟子』のものだけは少し異なるのであろうかと疑問を提出している。しかし結局はそれぞれが矛盾しないものとして説明し

てしまふのである。^⑥

しかし『史記』の夷斉説話と『孟子』の伯夷の話との間にはかなりのへだたりがあり、異質のものであると見なければならぬ。後に述べるように、前者では相当の脚色がなされていることから云ってもこう考えるべきであろう。さてこのへだたりの最大のものは、『孟子』においては、紂王の悪政を避けたことがしばしば云われていることで、紂王を貶して文王を賞推することが話の中心になっているのに対して、『史記』においては、周の武王の行為を批判することが大きな中心になっていることであろう。つまり『孟子』では周王室の正当性を認め、殷周革命を肯定的に説くための資料にされる性質が濃厚である。これは『孟子』が梁恵王篇で、湯王が桀を武王が紂をそれぞれ伐ったことについて、斉の宣王の「臣弑其君可乎」との問いに対して、孟子が「殘賊之人謂之一夫、聞誅一夫紂矣、未聞弑君也」と答えているのによって、革命思想が是認されるのを見ても当然と云えるし、文王を理想の為政者とすることも深い関わりを持っている。

これに対して『史記』のものはこれと逆の立場に立つ可
能性さえ持つ。すなわち周王室の存在に対してはむしろ否
定的でさえあると云えるのである。同様な面を指摘するな
ら、両者ともに夷斉の善正を指し示し基準的存在者として
扱おうとする点が注目されるものの、やはり両者の間のへ
だたりは否めない。これは恐らく時代背景やそれを取りあ
げた思想家の立場が深く関わっていたからであろう。つま
り、本来のモチーフが、特殊な時代背景の中で特定の思想
家によって少しづつ脚色されて、本来なかったものが付加
されたり、もとあったものが削られたりしたものと考えら
れる。

伯夷の話が戦国時代に相当の変容をとげたことについ
て、崔述の『豊鎬考信録』は、特に『史記』に見える夷斉
説話の脚色の極端さを指摘し、その根拠を次のように述べ
ている。

蓋当戦国之時、楊墨並起、処士横議、常非堯舜薄湯武以
快其私、故或自為論毀之、或託諸人以毀之、是以毀堯則
託諸許由、……伯夷既素有清名、又適有餓首陽一事、故
附会為之説、以毀武王

戦国期の諸子百家が排出するなかで、それぞれ自論の特
異性を主張するために、聖賢として固定している理想の帝
王たちを好んで否定しようとする風潮がおこって来て、こ
れらに関連して武王も批判の対象にされた結果、伯夷との
話も附会されたのであるというのである。戦国時代諸子の
議論の中で夷斉説話がいろいろな変化をなしたということ
はうなづける。こういう風潮の中で、有名無実の存在とな
った周王室に対する批判がでて来てふしぎではな
いし、むしろ列強蜂起という状況がこれを必要としたこと
は十分考えられることである。そしてそのような状況を背
景として成立した説話断片が司馬遷の記述の資料にされた
であろうことは想像に難くないところである。そしてこれ
に類したことは『孟子』の場合でも云えることであって、
伯夷が避けたことや文王をしたったという話にしても、孟
子が文王を賞揚せんがために、本来はもすこし異なった話
であったものにくわ分が肉付けしたものかも知れない。た
だ『孟子』以前の資料はありそうにないので、『孟子』の
中でどのような新しい脚色がおこなわれたかについては不
明である。^⑦

以上『孟子』に見える伯夷の話から考えると、『論語』に見える夷齊が『孟子』以前に成立したものでどうかとも問題であろうし、その背景の説話が現在注釈に用いられるようなものであったかどうかとも問題といわねばなるまい。

(四)

『孟子』の伯夷と『史記』の夷齊との間には以上見て来たような大きな差があるわけであるが、一応この中間的な存在であり、司馬遷が有力な資料にしたであろうと思われるものに、『呂氏春秋』季冬紀第十二の誠廉篇に見えるものと、これに酷似した内容を持つ『莊子』讓王篇のものがある。両者ともにほとんど異なりはないといえるものの、細かな部分においては異なりが指摘されるので列挙してみる。上は『呂氏春秋』、下は『莊子』である。

昔周之將興也、有士二人、処於孤竹、曰伯夷叔齊、二人相謂曰、吾聞西方有偏伯焉、似將有道者、今吾奚為処乎此哉、二子西行如周、至於岐陽、則文王已歿矣、武王即位、觀周德、則王使叔且就膠鬲於次四内、而与之盟曰、加富三等、就官一列、為三書同辭、血之以牲、埋一於四内、皆以一婦、又使保召公就微子開於共頭之下、而与之盟曰、世為長侯、守殷常祀、相奉桑林、宜私孟諸、為三書同辭、血之以牲、埋一於共頭之下、皆以一婦、伯夷叔齊聞之、

昔周之興、有士二人、処孤竹、曰伯夷叔齊、二人相謂曰、吾聞西方有人、似有道者、試往觀焉、

至於岐陽、

武王聞之、使叔且往見之、

与盟曰、加富二等、就官

一列、血性而埋之、

相視而笑曰、噫、異乎哉、此非吾所謂道也、昔者神農氏之有天下也、時祀尽敬而不祈福也、其於人也、忠信尽治而無求焉、樂正与為正、樂治与為治、不以人之壞自成也、不以人之卑自高也、今周見殷之僻乱也、而遽為之正与治、上謀而行貨、阻丘而保威也、割牲而盟以為信、因四内与共頭以明行、揚夢以說衆、殺伐以要利、以此紹殷、是以乱易暴也、吾聞古之士、遭乎治世、不避其任、遭乎乱世、不為苟在、今天下闇、周德衰矣、与其竝乎周以漫吾身

二人相視而笑曰、噫、異哉、此非吾所謂道也、昔者神農之有天下也、時祀尽敬而不祈喜、其於人也、忠信尽治而無求焉、樂与政為政、樂与治為治、不以人之壞自成也、不以人之卑自高也、不以遭時自利也、今周見殷之乱、而遽為政、上謀而下行貨、阻兵而保威、割牲而盟照以為信、

揚行以悅

衆、殺伐以要利、是推乱以易暴也、吾聞古之士、遭治世、不避其任、遇乱世、不為苟存、今天下闇、周德衰、其並乎周以塗吾身、不如避之以繫吾

也、不若避之以潔吾行、—— 行、二子北行、至首陽之

二子北行、至首陽之下而 山、遂餓而死焉

餓焉

兩者に共通する点について云うなら、ここにはすでに孤竹の名も見えるし、伯夷叔齊の二人になって登場している。特に『孟子』のものに比して異なる点を云えば、表現的にも説話として定着され、内容的にも、紂王に反抗したことは消えてしまつて、武王の革命を批判し周王朝成立についての正当性に対して痛烈な批判が投げかけられられる要素が明確に出て来ている。しかしなお、二人が文王の徳にひかれて周国に赴いたというモチーフは、特に『呂氏春秋』の場合には明確に見えており、『孟子』のものが変形されずに受け継がれているものである。ただ『孟子』ではそれが殷王の暴挙を批判するに効果的なモチーフであるに対して、こちらでは『史記』の内容と同じく、武王の征服行為の批判に重要な役目をはたしている点に差が認められる。また、『史記』に、夷齊の作った歌として見える神農のことや「以暴易暴」という表現などが、既にここに見えるているのは興味深い。

次に『呂氏春秋』・『莊子』の比較をしてみる。羅根沢の『諸子考索』(「莊子外雜篇探源」の十)にも指摘するよ
うに、『莊子』の讓王篇には、すでに『呂氏春秋』に見え
ている記述が多く、この夷齊の説話なども『呂氏春秋』の
文をもとに採録されたものと考えてよいであろう。したが
って兩説話の間にはほとんど差異は認められないと云って
よい。しかし二・三の細かな点での異なりは指摘できる。

まず『莊子』のものには、見てわかるように、いくらか
省略された部分が目立つということである。例えば、『呂
氏春秋』で、「今吾奚爲処乎此哉」から「皆以一婦、伯夷叔
齊聞之」までの間について、『莊子』のものでは省略が著
しい。『呂氏春秋』では、二人は文王の徳に感じて周にや
つて来たこと、ところが文王は既に没していて武王が即位
していたこと。また武王が周の徳と威力を示すために、叔
且と膠鬲とを、保召公と微子開とをそれぞれ盟せしめた
ということ聞いた二人は大いに失望したというふうに述べ
るわけであるが、『莊子』のそれでは、先ず文王につい
て、ただ「西方有人……」とのみ表現するだけで、文王に
会うことが目的で二人が岐陽に赴いたのかどうか明確には

されない、ここではすでに文王のイメージはなんら重要な
役割を果たしてはいないように思われる。

特に『呂氏春秋』では、「今吾奚爲処乎此哉」とまで表
現することを考えると、このことはなおさら確実に思える
のである。ところで、『莊子』のものではこの後に続く部
分は、『呂氏春秋』のものとかかなりの異なりを示してい
る。すなわち、『莊子』のものでは、武王がうわさを聞いて、
叔且を二人のところに行かせて、これらとの直接の盟
をさせようとしたところ、二人がこれを聞いて断つたのみ
ならず、そのようなやり方をする武王に失望し周を批判し
たという形になっている。夷齊が武王の政策を第三者とし
て傍観して批判する『呂氏春秋』の形式と、夷齊が武王の
政策の受け手となって、武王の行為を批判する形式との異
なりがここに見られるのである。ただ形式的にはこれだけ
の異なりにしか見えないが、実は内容的には一つの大きな
差であるとも云えるのであって、『呂氏春秋』にはまだな
かった新しい話の形式が『莊子』のものには生まれている
と云えるのである。それは『莊子』のものに、武王が伯夷
叔齊を招致しようとしたということが云われていることで

あつて、これは『呂氏春秋』にはまだ芽生えていない形式であることである。『史記』には、夷斉が武王から用いられようとした話は見えないが、武王との出会いは武王の討伐行爲を批判する話として、『呂氏春秋』や『莊子』からもう一段の發展をしている。『莊子』のように、武王が夷斉を招致しようとしたという形式は他にも見られ、『韓非子』姦却弑臣篇の、

古有伯夷叔斉者、武王讓以天下而弗受、二人餓死首陽之陵

は、『莊子』のものとは、天下を讓られようとしたという点に差があるけれども、武王から積極的な働きかけを受けたという点では類似性が指摘される。同じく説疑篇にも許由や卞隨・務光らとともに、「或与之天下而不取」の十二人のうちに含まれているものが見えている。やはりこれらは『莊子』において、武王が夷斉を招こうとしたという話の変形または同列の説話と見ることができるのである。『莊子』のこの讓王篇については、従来、後人の仮託であることが云われているところであつて、『韓非子』のものどどちらが先か後かはにわかに断じられないけれど

も、讓位のことは、武王と二人の出会いということからも、招かれようとしたということからも一段飛躍したものが感じられるところからみると、やはり『韓非子』のもの脚色性が強いであろう。なお位を辭して餓えたことは『莊子』盜跖篇にも、

伯夷叔斉、辭孤竹之君、而餓死於首陽之山

とあり、『戦国策』燕策にも、

汗武王之義而不臣焉、辭孤竹之君、餓而死於首陽之山

と見えている、これらに見えるところの孤竹の君を辭したという説話の型式は、おそらく『史記』で孤竹の君位をすてて周に赴いたという話にされたものであろうが、もとは武王から招かれたとか位を与えられようとしたこととかとの関わりが強かったのではあるまいか、本来、紂王の悪政から逃れて、文王に帰属しようとしたという話があつて、周王室の衰微が著しくなった戦国末期に至ると、周政権を否定して新しい政権の登場を合理化せんとする主張をする者によつて、武王の行爲を批判することがおこり、周に赴いた伯夷の話は武王に失望するという話の進展を見、こうして武王に帰属しなかつた伯夷の話は、あるいは武王が

ら位を譲られたという『韓非子』の話となり、あるいは領地を与えられようとした話になったのではあるまいか、『史記』のように孤竹の国を出て文王の所に行こうとしたという話よりも、孤竹国は、伯夷又は叔斉の二人に与えられようとした領地としての話として先ず登場したのではあるまいか。

またこの他では、『呂氏春秋』に、『至首陽之下而餓焉』とするに對して、『莊子』では「餓而死焉」とするのが注目されてよいであろう。許維綽の『呂氏春秋集釈』は、「死」字を脱するものと考証しているが、これはむしろものままにすべきではあるまいか、「死」字を加えるものの方が後出性を持つと考えられるからである。なぜこのように考えるかという点、そもそも『論語』の季氏篇の文には、「伯夷叔斉餓于首陽之下」とのみ云っているのであって、死すると云っていないのは注目すべき事柄なのであって、これについては、『史記』にも「遂餓死於首陽山」といっていることとの関連で、しばしば論じられているところである。梁玉繩が『史記志疑』で、『論語』に云う餓うは餓死したのではない。例えば、孔子が陳蔡の間に餓えた

と云っても餓死したのではないのと同じであると言べるのはそれで、崔述も、『論語』が餓死とは云わないことを指摘する。劉宝楠の『論語正義』は、『淮南子』説山訓の注を引いて、餓は困乏のことであるとし、錢可選の「疑夷斉不食周粟、非絶粒不食也……餓而食薇者、粟或不足、有時采薇以充之、未必止食薇也」というのを引いている。中井積徳は、『論語』はただ餓えると云っているのであって死したとは云わない、死すると云ったのは諸子にはじまるものとしている。

以上、述べる基準は多少異なるけれども、餓うと死すとは本来別であることを論ずる資料となり得る。「餓えて死す」と考えるのはやはり後のものである。かくて、『呂氏春秋』に「死」と云わないで『莊子』のものが「死」を云うのは、後者が前者の採録で、しかもその他の影響を受けたからであり、この点にも『莊子』のものが、後の成立であると云える証が存するのではなからうか。なお、玉叔岷氏「史記料證」卷六十一（『文史哲學報』第十七期）は、『呂氏春秋』が『莊子』から採録したものとしているが、これは既に述べたように逆であると考えるべきではあるま

いか。

(五)

以上、『孟子』から『呂氏春秋』・『莊子』へと夷斉説話の變化をたどって見たが、司馬遷はおそらく、『呂氏春秋』・『莊子』などを主な資料として伯夷列伝を作りなしたのであるが、しかしなおこれらとの話の間には相当の距離が存することは否めない。恐らく当時夷斉に関する資料としては雑多なものが存在したに相違ないと思われる、それらは司馬遷の手できわめて要領よく辻褄の合うようにまとめあげられたのであろう。例えば既に一寸述べたことであるが、伯夷叔斉が位を譲り合つて国を出奔したということは『史記』以外には見えないことなのに、このようにまとめあげられた基本資料としては、『莊子』讓王篇の、武王が二人を招致しようとした話、『韓非子』の、武王が天下を譲ろうとしたということ、また『莊子』盜跖篇の「伯夷叔斉辞孤竹之君、而餓死於首陽之山」や『戦国策』燕策の「汗武王之義而不臣焉、辞孤竹之君、餓而死於首陽之山」などがあげられると思われる。これはこれだけが資料にな

ったということではなく、これらに見えるような話が資料になったと思われるのである。これらによれば、『史記』の、自国の位を譲り合つて出奔したという話ではきすぎの感もある。『莊子』盜跖篇や『戦国策』に見える「辞孤竹之君」は、『莊子』讓王篇や『韓非子』姦劫弑臣篇に見られるように、武王が二人に封を与えようとした、または天下を譲ろうとしたという話と近いものである。孤竹の国から周へ赴いたという話は、『孟子』に見えるように、文王をしたつて周へやつて来たという話などとの関係で、二人の出自を明確にせんがために、『呂氏春秋』や『莊子』に設定され、義に生きた夷斉のイメージと自国出奔の原因を明確にするために、孤竹の君を辞したと云う資料との関わりの中で、司馬遷が、位譲りの話としてまとめあげたものと考えられる。

『史記』伯夷列伝で、「伯夷叔斉、叩馬而諫曰云々」の条は最もドラマチックな場面である。恐らくこれは司馬遷の創作意欲の最も強く出ている箇所であらう。武王に対する批判の仕方には、『呂氏春秋』・『莊子』に比べるとかなりの差がある。『呂氏春秋』においては、

今周見殷之僻乱也、而遽為之正与治、上謀而行貨、阻且而保威也、割牲而盟以為信、因四内与共頭以明行、揚夢以説衆、殺伐以要利、以此紹殷、是以乱易暴也

というのが武王を批判する核である。即ち、殷の弱みにつけ込んだにわか仕立ての偽正義、本質的な治の精神を無視した武力で無理おしをするのであるのに、表面では極めて形式的に、支配者としてふさわしい威徳を示そうとする。為政の場に登場するための手の込んだ演出というものが厳しく指摘されている。これが『史記』になると、同じく武王を批判しながら少しく異なる。批判の中心は

父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑君、可謂仁乎

というきわめて類型的な儀礼精神をあらわす語に集約されている。すなわち父に対する孝、君に対する仁という二語によって示されている。『呂氏春秋』においては、戦国動乱期の荒々しい批判語が見え、夷斉そのものも、武王から招聘されようほどの人物として描かれて、ほとんど武王と対等の場に立って批判する厳しさを持つのに対して、『史記』においては、型にはまった忠孝精神が批判の語になっており、これの記される時代背景が、もともと忠孝精神を

強く要求するところの落着いた漢政権であることを明確にあらわす。既に夷斉は武王と対等の場には立ち得ていない。対等であるとするならそれは君臣父子の礼を主張する点においてだけである。強い権力者に対する一臣民としての面影しかない。君に対する臣の諫言になってしまっているのである。それ故にこそすべての規範の発源である絶対者を諫める夷斉は、武王に発言権を持つ太公ほどの人物の仲介を得ないでは生きて在ることはできない厳しい状況に立たされており、それだけに、命をかけて進み出た二人の気魄の異常さ激しさが強く出ていよう。

李陵事件で武帝に進言した司馬遷が、終には挫折せざるを得なかった事実の体験とその苦渋がこの場面に変形して表現されていると見ることにはできないであろうか。断片的にいろいろな広がりを持った夷斉説話が、司馬遷によって一つのストーリーにまとめあげられた時、最も強く脚色された部分はおそらくこの場面であつたらう。そして司馬遷が伯夷列伝をたてた意の一はここにも存したのであろう。

(六)

『史記』の夷斉説話の特色は以上のような点にあるが、夷斉説話の他の広がり部分の思わせる資料をいま一つ検討してみる。

『文選』卷五十四、劉孝標の弁命論に、

夷叔斃淑媛之言

なる一句があつて、その李善注に、譙周の『古史考』を引いて、

伯夷叔斉者、殷之末世、孤竹君之二子也、隱於首陽山、采薇而食之、野有婦人謂之曰、子義不食周粟、此亦周之草木也、於是餓死

という。『古史考』については、『隋書』經籍志に、「古史考二十五卷」と載せられるそれで、『史通』正史篇にも、「晋散騎常侍巴西譙周、以遺書周秦已上或采家人諸子、不專擬正經、於是作古史考二十五篇、皆憑旧典以糺其繆、今則与史記並行於代焉」と云う。三国末晋初の人である譙周がはたして司馬遷より古い資料を手に入れ得たかどうかは疑問の存するところであるが、『晋書』司馬彪伝に、「彪

復以周為未足善也、条古史考中凡百二十二事為不当、多拠汲冢紀年之義、亦行於世」とあつて、司馬彪が「古史考」中の誤れる記事を、晋の太康五年に出現した『竹書紀年』によって訂正したと云っているのが注目される。

このことからしても、晋のこの当時には一般には相当信頼される資料価値を持っていたものと思われる。ただこの夷斉のことにのみに限って云うなら、周の武王に反抗したという話そのものが戦国末にできあがつた話と思われるし、首陽山に餓えたとか餓死とかは各書に見えるけれども薇を食ったという話は司馬遷の創作にかかると思われ、このような行為を逆に批判するものが『古史考』の婦人の言である以上、『史記』以前から存在した話で、司馬遷がこれを取りあげなかったまたは知らなかった資料とは考え難いところである。むしろこれはできすぎた『史記』の夷斉説話をつつために創られた話であつたのではなからうか。しかし定着した夷斉説話は否定するに至らず、むしろ、義をつらぬく人物の象徴として提出された夷斉に対して、薇を食つて餓死したという行為をもつと完全に説明するための資料にしかなり得ていない。この点にも、これが『史記』以

後のつけ足しであると思われるものが存する。これは『史記』以後の夷斉説話の新たな展開とみるべきであろう。

(七)

以上述べたように、『孟子』の伯夷から『史記』の伯夷列伝成立の間には、細かく屈折した変形・発展・広がりがある認められるのである。たとえ『論語』の夷斉が比較的新しい成立の説話を背景に持つとしたところで、『史記』の夷斉のイメージで解されて良い理由は全くないと云ってよいであろう。

『論語』に見える夷斉の四文の内、きわめて公式的な考えに従うならば、公治長・述而のものは上論、季氏・微子^⑬のものは下論に属するから、少くとも成立の時期は異なる^⑭と見てもよいのではなからうか、こう見ることができると、下論の二は『史記』に近く、上論の二はむしろ『孟子』のものに近いように思える。特に前の二つの共通点がある。「怨」によっているところは、成立時期が似通っていることを思わせる。述而篇に見える「求仁而得仁、又何怨乎」

は従来、夷斉が国を譲り合って出奔した話で説明され、衛の靈公の太子蒯聵と蒯聵の子輒との話と関連づけられ、『論語正義』も、子貢が夷斉について孔子に質問した結果、孔子が衛の君に力をかさない^⑮と結論した理由として、「若伯夷則又遵守父命、而終讓国不受、与衛蒯聵之棄父命而争国者相反」と云う。これも一応もつともらしく説明がつきそうであるが、この文の「衛君」をたまたま蒯聵のことにあてはめるからこの様に解されるのであって、なにも夷斉の位譲りと関連させなければならぬ必然性は見あたらない。

しかも夷斉の位譲りのことは『史記』以前にはなかったろうと思われる点を考え併せてもこのことは云えよう。むしろ『孟子』に見えるように、紂王の暴虐から身をへだてたというのに近い話が背景に存したと考えてよいのではあるまいか。しかし残念ながら、『論語』のこの文の背景にどのような夷斉説話が存したか、具体的なものは明確にできない。ただ上論の二は『孟子』以後間近く、下論の二は『呂氏春秋』・『莊子』または『史記』に見えるような夷斉説話が成立した時期に近く成立したものであろう。

以上、伯夷叔斉の話は時代的に『論語』より出発したと考えるべきでなく、むしろ『孟子』のものが早いと考えるべきであろう。そして『史記』に見えるような説話として安定する以前にはいろいろな広がりを持つモチーフが、それをとりあげた思想的立場や時代背景の中で展開しているのである。そして最終的には、『論語』の夷斉が『史記』に見える夷斉の説話によって解釈できそうに思えるのは、『論語』の文が成立した当時にそのような説話がすでに成立していたからではなく、司馬遷が『論語』の夷斉を相当強く意識していたからに他ならないと云えるであろう。

「伯夷・叔斉不念旧惡、怨是用希」とか「求仁得仁、又何怨乎」というような文における「怨」は、むしろ司馬遷の持つ特殊な人間観や歴史観によって、伯夷列伝のような説話との関連を生ぜしめられたものと考えらるべきであって、きわめて作爲的なものとしなければならぬであろう。司馬遷と伯夷列伝または『史記』の關係についてはもっと考察しなければならぬが、ここには論じきれないので結論的なものだけに止めた。

註①

① 「葛洪の逸民」（広島哲学会刊『哲学』第十八集）・『抱朴子』外篇における隠者賛美の意味（同上『哲学』第二十二集）・『抱朴子』に於ける逸民と仙人（『東方宗教』第二十九号）・専制社会と隠逸―儒教經典でのあつかいを通して―（福岡女子短大研究紀要第四号）など。

② これについてはまだ発表の場を得ていない。

③ 津田左右吉著「論語と孔子の思想」頁一九〇～一九一。

④ 「逸民」という語が『論語』において隠遁者の意に用いられるか否かについては問題が存すると思う。例えば『漢書』律歴志上の「挙逸民」の顔師古注は逸民謂有徳而隠処者」と云っている。この他『潜夫論』などでもそうであるが、後漢以後の文献では、後世隠者と称される人びとを表現する語として用いられるものも存するようである。しかし、『論語』でそのように解するには、柳下恵や少連なども同列にあるのを見ても困難である。『孟子』万章下篇に柳下恵を「遺佚而不怨」と云うが、この「佚」と同意に解すべきであり、朱子も微子篇のここに「逸遺逸、民者無位之称」と云っているのは注目すべきである。なおこのことについては別に明らかにしたが、紙数の都合でここにはその詳細を発表できない。

⑤ 例えば、頁一九一に「韓非子の外儲説には將軍として葬られたとあるから云々」とあるが、『韓非子』本文は、「卯曰、伯夷以將軍葬於首陽之下、而天下曰、夫以伯夷之賢、与其称仁、而以將軍葬、是手足不掩也」となっていて、將軍として葬られたという事実を述べるのではなく、もし葬られたならばという仮

定を述べているにすぎない。

⑧ 伯夷のみ云うことについては、「為其兄可_レ見弟」とし、『史記』で、讓国により出奔したことから始まるのは、事によってこのように書いたのであって、その心は紂の悪を避けたことから起こるのであって、『孟子』はその心に依ったものであるとする。

⑦ 『墨子』尚賢中篇には、「伯夷降典、哲民維刑」とある。これは『尚書』堯典に見える伯夷であるが、説話上でこれとの関連をたどることは困難である。

⑧ 『史記会注考証』引

⑨ 『荀子』の成相篇に見える許由・善卷・下隨・牟光はみな『莊子』讓玉篇によるものだから、讓玉篇の夷齊のことも『呂氏春秋』の後ということはないと云う。

⑩ 『史記索隱』は「其伝曰」下に、伝とは『韓詩外伝』・『呂氏春秋』であろうと云うが、今本『韓詩外伝』では夷齊のことは卷三に見えており、これは『孟子』万章下篇のものと大略同じものである。唐代の『韓詩外伝』中にはもっと異なった夷齊説話が見られたのであろうか。

⑪ 『史記』呉太伯世家の讓位説話とは直接の関連性は見出せないが、司馬遷はこれを意識していたのではあるまいか。

⑫ 『楚辭』天問篇に、「驚女采薇、鹿何祐、北至回水、萃何喜、」とあり、王逸注は、「言昔者有女子采薇菜、有所驚而走、因獲得鹿、其家遂昌熾、乃天祐之、……言女子驚而北走、至於回水之上止而得鹿、遂有禮喜也」とする。しかし朱子は『楚辭

『史記』の伯夷・叔齊以前（下見）

集注』に、「此章未詳、亦当闕」としている。一方この句を伯夷叔齊の説話と結びつけて解釈する立場がある。『文選』卷五十四の劉孝標の弁命論に、「夷叔斃叔媛之言」の一句があり、李善注に『古史考』を引いていることは本文に述べたが、これと類似の内容のものがこの他にもある。『路史余論』卷三に『三秦記』を引いて、「夷齊食薇三年、顔色不變、武王戒之、不食而死」とある。『桐玉集』感感篇に、「列士伝」を引いて、「伯夷兄弟、遂絶食七日、天遣白鹿乳之」とする。この他『路史後紀』卷四は『類林』の「夷齊棄薇不食、有白鹿乳之」とするのを引いている。また『広博物志』は「夷齊餓於首陽、白鹿乳之」とし、『金樓子』興亡篇には「伯夷叔齊餓於首陽、依麋鹿以為羣、叔齊起害鹿、鹿死、伯夷悲之而死」と見える。『芸文類聚』卷三十七の魏の靡元の弔夷齊には、「首陽誰山、而子匿之、彼薇誰菜、而子食之」と云う。夷齊についてのこのような説話が存することから、王逸の注を非として『楚辭』天問の前引の句は伯夷叔齊のことを云ったものとするものに、毛奇齡（『天問補註』）・丁晏（『楚辭天問箋』）・蔣驥（『山帶閣楚辭注』）などがある。姜亮夫は、夷齊のことは古代忠貞伝説の最もすぐれたものだから、天問に「驚女」もふれないわけではないとして、毛・丁・蔣氏らの説を是とする。また聞一多は、天問に見える「驚女」は「女驚」の誤倒であり、「驚」は「警」の意であるとして夷齊が薇をとるのを警めたと解している。

以上のような説が存するにもかかわらず、天問のこの一句はなお明確に解しきれない。朱子の云うように「当闕」とする考

え方を是とすべきではあるまいか、もちろん王逸の云うところも、天問の本文の意味しているところとどれほどの関りがあるかわからない。いずれにせよ、『古史考』の云う説話以下、すべて『史記』以後に成立したものと考えるが妥当で、これをもってかの天問の一句を解するは困難であらう。

⑬ ただ逆に考えるなら、司馬遷は衛国のこのような事歴について「衛康叔世家」第七にも述べているように、『左伝』定公十四年に見えるような事の経過を知っていたであらうから、『論語』のこの文をこれと関連づけて考え、「呉太伯世家」第一のような話とも関係づけて「伯夷列伝」初の位譲りの説話が考え出されたのかも知れない。しかしなにも断定するだけの資料は今のところ見あたらない。

伯夷叔斉について論じたものは多数あるが、最近のものでは、○井上源吾氏「儒家と伯夷盗跖説話」（『支那学研究』第十三号）。○森安太郎氏「伯夷叔斉は狐である」（『黄帝伝説』古代中国神話の研究）。○安本 博氏「伯夷・叔斉について」（『待兼山論叢』二）。○波多野鹿之助氏「伯夷列伝」の構成（『同志社国文学』三）。○王叔岷氏『史記輯證』卷六十一伯夷列伝（『文史哲学报』第十七期）などがある。

（福岡女子短大）

The Change of "Po I • Shu Chi (伯夷 • 叔齊)"

Takao Shimomi

"Po I • Shu Chi", We know that they made much of their strong faith for their life.

The story of "Po I • Shu Chi" was finished by Ssūma Ch'ien (司馬遷) in "Shih Chi-Po I lieh ch'uan (伯夷列傳)". We usually understand the style of this story only by "Po I lieh ch'uan", but this story in "Shih Chi (史記)" is different from that in "Mēng tzū (孟子)", "lu shih ch'un ch'iu (呂氏春秋)", "Chuang-tzu (莊子)", etc.

In this paper, I've shown how "Po I • Shu Chi" changed in the author and back-ground.